

<p><b>4月19日</b> <b>(日)</b></p> <p>歴代誌下 <b>1章</b></p>	<p>「ソロモンは…全会衆と共にギブオンにある聖なる高台へ行った。そこには、かつて荒れ野で主の僕モーセが造った神の臨在の幕屋があった」(2～3節)。ダビデから王位を受け継いだソロモンは、父ダビデの賛美にあふれた礼拝とモーセたちの幕屋での礼拝を取り入れて、礼拝をささげた。わたしたちも、賛美と感謝と主の言葉を中心とする礼拝に招かれて。</p>
<p><b>20日</b> <b>(月)</b></p> <p>歴代誌下 <b>2章</b></p>	<p>「主の御名のために神殿を建て、これを主のために聖別して…絶えずパンを供え、…我らの神なる主の祝祭日に、焼き尽くす献げ物をささげ、この事がイスラエルにおいていつまでも守られるようにしようとしています」(3節)。ソロモンが大切にしようとしたようにわたしたちも主なる神にささげる礼拝をいつも意識しつつ、歩むことができますように。</p>
<p><b>21日</b> <b>(火)</b></p> <p>歴代誌下 <b>3章</b></p>	<p>「ソロモンはエルサレムのモリヤ山で、主の神殿の建築を始めた。そこは…あらかじめ準備しておいた所で、かつてエブス人オルナンの麦打ち場があった」(1節)。ダビデが主の前に悔い改めたその場所をソロモンは、神殿建築のために取り分け、神殿を建築した。主の裁きと贖いが示された場所が、礼拝の場であることを覚えたい。</p>
<p><b>22日</b> <b>(水)</b></p> <p>歴代誌下 <b>4章</b></p>	<p>「ソロモンは青銅製の祭壇を造ったが、その長さは二十アンマ、幅は二十アンマ、高さは十アンマであった」(1節)。かつてモーセが造った祭壇よりも、3倍4倍も大きな祭壇。ソロモンにとって神賛美は何よりも大切だったということだろう。多くの民と一緒に礼拝をするために、ソロモンは、神殿を整えた。私たちはだれと一緒に礼拝をささげることができるだろうか。</p>

<p><b>23日</b> <b>(木)</b></p> <p>歴代誌下 <b>5章</b></p>	<p>『ラツパ奏者と詠唱者は声を合わせて主を賛美し、ほめたたえた。…「主は恵み深く、その慈しみはとこしえに」と主を賛美すると、雲が神殿、主の神殿に満ちた』(13節)。神殿で礼拝をささげる時、主の栄光が神殿一杯に満ちる。声、楽器、聖書の言葉によって、主に感謝と賛美をささげる場所。私たち一人ひとりが主の宮として礼拝をささげていきましょう。</p>
<p><b>24日</b> <b>(金)</b></p> <p>歴代誌下 <b>6章</b></p>	<p>「わが神よ、この所でささげる祈りに目を向け、耳を傾けてください」(40節)。主は、イスラエルの民が奴隷であったころから共におられた。イスラエルの人たちの祈りに主は、心を向けておられた。主の神殿として私たちを用いてくださる神に、私たちも祈り続けたい。先の見えない状況であっても、私たちに主の言葉が備えられ、励まされていることに感謝して</p>
<p><b>25日</b> <b>(土)</b></p> <p>歴代誌下 <b>7章</b></p>	<p>「彼らは、主がダビデとソロモンとその民イスラエルになされた恵みの御業を喜び祝い、心は晴れやかであった」(10節)。これまでの主の守りと導きに感謝して、主の御名をあがめる時、イスラエルの民の心は晴れやかであったと聖書は語る。共なる礼拝ができない中で、主の名によって集うことの大切さを知る。主がその時を供えて下さっていることを覚えて</p>
<p><b>26日</b> <b>(日)</b></p> <p>歴代誌下 <b>8章</b></p>	<p>「王が祭司とレビ人について命じたことは、宝物庫のことも含め、何事もおろそかにされなかった」(15節)。ダビデが整えた祭司やレビ人たちの奉仕は、聖歌隊、奏楽、門衛、宝物庫の管理にいたるまで、ソロモンによって大切に継承された。どんな小さな奉仕もおろそかにしない、祈りを込めて神にささげる一人ひとりの奉仕が、礼拝を生きた神礼拝にするのだ。</p>